

経済データの見方

東京大学教授 西村清彦

(日本経済新聞「経済論壇から」2004年7月25日)

経済データを見る、そしてそれを用いた議論を読むときに頭に入れておかなければならないもう一つの点は、同じデータでも、見方を変えると全く違った印象を人に与えるということである。今月、この点をすどく衝いた論説を展開したのは一橋大学教授の高山憲之氏(週刊エコノミスト7月6日号)である。

厚生労働省は今般の年金改革で、バランスシートでみて550兆円にのぼる債務超過額が改革後にはほぼ解消するとしている。高山氏によれば、これは実は過去拠出分と将来拠出分を区別せずに足しあわせることで、真の負担分布の姿を覆い隠している。

今般の年金改革は、実は将来拠出分を増加させることで、実に420兆円の「資産超過」を生じさせ、それを過去拠出分の420兆円の債務と帳消しにしようとするものであることを分かりやすく示している。これは別段データを誰がねつ造したというのではない。それ自体は同じデータであっても、見方を変えると印象大きく異なるのである。